

論文審査の結果の要旨

2023年 2月 1日

申請者： DL2014-104 于 達

論文題目： 泉鏡花研究——中国文学受容を中心に

提出論文は、泉鏡花の中国文学受容について実証的な調査をもとに明らかにしようとしたものである。

前半は、作家論的なアプローチにより、鏡花と中国文学との関係を鏡花の生い立ち、交友関係といった周囲の環境や鏡花の蔵書を分析することによって追求している。特に蔵書については綿密な分析をしており、これまでの分類の不備などの指摘もしている。

後半は前半の考察を踏まえて、中国文学と関係のあるいくつかの鏡花作品について、中国文学的要素の受容のあり方を分析している。漢詩の断片的な引用から、翻案と見られる小説までその分析は多岐にわたるが、明治期の「琵琶伝」「白羽箭」についての分析では、漢詩の中のイメージが鏡花作品に取り込まれることによってどのような機能を果たしているか、中国文学的要素に注目することによって新たな読解の可能性を提示し得ている。また「知つたふり」「かしこき女」「妙齡」「画裡」といった中国文学をもとにした翻案作品については、それらが「秘蔵」される女から「姦通」する女へという変化を主題としていること指摘し、鏡花文学の一つの傾向を見いだしている。

原典と鏡花作品を単純に比較するだけでなく、作品を時代の中に置き直し、時代の中でどのようなアクチュアリティがあったかを追求している点も興味深い。上記4作品については、明治期に日本で求められた女性像に対して鏡花がどのように反応したかを考察している。

大正期の作品である、「十三娘」「雨ばけ」「光籃」を論じる際には、それらが一つの原典だけでなく、自在に多くの中国文学作品を接合して成立したユニークな作品であることを明らかにすると同時に、ここでは時代的な背景以外にも、これらの翻案作品が中国的要素を保持しつつ、いかに日本的な文脈に定着されているかを、民俗学的な知見を援用することによって分析し、作品の複雑さを明らかにしている。

以上の述べてきたように、実証的な方法をとつつも、間テクスト的な問題、また対読者意識の問題などにも触れた、総じて高いレベルの研究となっており、特にこれまで言及されることのなかった原典をいくつか明らかにできたことは中国人研究者ならではの功績であると思われる。

1月26日に行われた口述審査においては、時代区分などに関する言葉の細かい選択の問題や、鏡花作品の全体的な変遷の理解について、また現在保管されている鏡花の蔵書の歴史の変遷についてなど、いくつか注意すべき点が指摘されたが、泉鏡花研究に新たな貢献をなす内容であること、デジタル資料などを縦横に用いた新しさを感じさせる研究であることなど、審査員全員から非常に高い評価を受けた。博士の学位にふさわしい論文と判断される。

審査員（主査） 渡邊 拓

審査員（副査） 長尾 宗典

審査員（副査） 鈴木 啓子（外部審査員）

審査員（副査） 劉 利国